

関西ペイント新社長

小谷憲孝氏訪問の記

木畑 龍 治 郎

を頂いた。それは金五十円、当時としては莫大な賞で、私はその使い途に困った。早速名古屋新聞社へ行って、その中二十円を関東震災見舞金として寄附、残る三十円で松坂屋で予て目を付けていた手が届かなかった英国製ステットソンの帽子を買った。どうもその当時から私は、スタイルリストだったらしい。その帽子は東京空襲で家や家財と共に焼けて、国民服一着の着のみ着のままとなった。余談だが、東京空襲の時は日本橋の呉服橋に住居があったが、この時も町会の警防団に籍があったばかりに、町会の人や見知らぬ人達、通行人や怪我人を高島屋の地下へ担ぎ込んだり、医者に手伝って学校の医務室へ薬を探がしに行ったり、自分の家の焼けたのも後になって知ったり、テナヤ、ワンヤだったことを思い出す。今四十七年余も昔のことを思い起し、更に今尚ほ元気で活躍して居られる当時の方々の消息を、たつみ会報で知る事が出来るなど、細々ながら余生を送りつつある身を仕合せに思う。

(旧鈴木商店
名古屋支店石炭部長)

〔きょうの人〕

「老齢年金をもらっているくらいだから若くありませんよ。社内の協力を得てがんばりますがね」

小柄で顔も小さく白髪の小谷さん、ひかえ目にしゃべりだすあたり、みるからに「好々爺」である。ただ、新社長として経営の進め方に話がおよぶと、やる気じゅうぶんのかまえい。

「成長する経済の状況に即応した経営をしていかねばなりません。なによりも多く売ることですよ。そして、利益をあげるためには、各部門が責任を持つ利益管理制度を積極的に推進していきます。決算期だけではなく、毎月ごとの勝負ですよ」

塗料業界は競争が激しく市況の低落では同社の九月期決算も大幅減益になっただけに、責任は重い。その点「商売上手」なのでうってつけといえる。大正十一年に名古屋市立貿易語学校を出て商社マンをめざし鈴木商店に入り、そこが倒産して昭和三年に関西ペイントに入社したが、現在までほとんど営業畑を歩いてき

十一月十七日午前十時、大阪市東区伏見町の関西ペイント本社に新社長小谷憲孝氏を訪問する。先般、在阪五社の大新聞其の他の報道で会員諸子にも既に御承知の事と思うが、此の度、我等の会員小谷憲孝氏は業界のトップメーカー、シエア第一の関西ペイント株式会社の社長として会社の興望と祝福の裡に就任せられたのである。高畑会長は一早くこのビッグニュースに大きな喜びと感動を持たれ、早速辰巳会としての祝意を伝え度いと発意せられた。偶々、私の甚仇で憎さも憎い畏友橋本(旧姓植野)賀一郎君が小谷氏の親戚に当り、小谷氏の斡旋で鈴木商店に入社したという親しい間柄なので、同君を煩わし関べ本社の秘書課を通じて面接を申込んだ処快く御了承、上記の日時を指定された。其の日の朝になって同行予定の柳田義一氏に急用が出来たので止むなく橋本君と二

た小谷さんでもある。

「わたしの信条は「誠意」ですがこれはセールスマンにとりたいていなことです。これさえあれば厚かましい売り込みでも、結局はお客さんにかわいがってもらえるものです」

昨年、社内の抵抗を押しきって年功序列制度から能力本位の人事管理へきりかえをおこなったのも小谷さんが推進したもの。また「本を読むというより買うのが趣味」と笑うが、毎年の新入社員には「マージャーンもいけど本を読め」といっているし、きびしい一面をのぞかせる。

ゴルフが好きで「腕前のほうは万年ビギナーですが、足を鍛えているので、歩くのは若い人に負けないつもりです」と元氣なところをみせている。六十七才の新社長ながら、同社をになう意欲は年齢を感じさせない。宝塚市中州二丁目九番十九号の自宅では八重夫人と二人暮らし、三男三女は、それぞれ独立、結婚しているが、正月の二日には孫の八人もいっしょに集まるのが恒例。文字通り「好々爺」になるわけである。

(四四・一一・一一産経記事)

人でお伺いした。

劈頭、型通り乍ら御祝の言葉を申し述べると、既に先日高畑、永井の御二方より懇篤なる祝辞を頂いて居り乍らまだ御返事も申し上げずに失礼して居たと、いともねんごろに且恐縮げに申された。橋本君とは「憲さん」「賀一ちゃん」と呼び合う程の近しさで、お互同志の家も近く、小学校も一緒という、親戚でも特に親しい仲なので、しばらくは故郷の山や河を中心に懐旧談がはずむ。

鈴木商店へは私等より一年早い大正六年の入店で間もなく名古屋支店勤務を命ぜられ、それからずっと終店時まで名古屋に在職されたと云う。その後、昭和三年に関西ペイントに入社、今日まで実に四十幾年只管にわき目も振らず歩み続けて来られたとの事であった。道すがらの詳しい御話は聞くよしもなかったが一生の大半を関西と共にあり、その興隆に心

楓さん(顯光院誓山禅英居士)

の人間像を偲ぶ

澤村 亮 一

今年の八月六日は早くも十三回忌に相当するそうで六甲の祥龍寺にてその法要を営むとの御遺族のお知らせを頂いた。生憎、その日は拠ない差支えがあるので盟友の今村頼吉さんと二日の辰巳会の幹事例会にて落ち逢う機会を以って御宅へ参詣することになった。

予定通りお伺いが出来て、さて呼鈴を押ししたが一向に応答がない、不審に思って裏口のガレージの方に廻ると、暫くして黒っぽいレース編みの身軽な洋装姿の未亡人が外出先から帰って来られた。今春、賀状にて梅若六郎師地頭の「融」の優雅な舞姿の絵葉書を賜っていたので記憶も新しく余りにも和洋装の鮮やかな変貌に目を瞠った。来訪の挨拶を申し上げると、折悪しく仏間の畳替えの最中で取り散らかして居るので失礼するとの事で取りあえず立ち話し、トピックは早くも十三年以前の懐古談に移る。当時肝臓障害の重態であ

魂を打ち込まれたであらう事が今日の大成を見るに至った事は容易に想像される事である。関べは元々岩井商店と密接な関係にあったが、はしなくも今回の大合同に端を発し、改めて日商岩井の系列に加った事は、氏の言によれば「矢張り目に見えぬ深い絆の働き」であったのだろう。感慨深くも西川社長との交流や、取引事項等を語られた。鈴木商店時代の思い出に話が遡及すると、氏の口から高橋半助、藤原長司、伏見俊助、楠田一二、田原保三郎、丸本道憲氏等の名前が出て仲々話の結末がつきそうもない。

私等は辰巳会の経過や現況を聞いてついでに説明し、この次の例会や全国大会に是非御参会下さる様懇請申し上げた。只、辰巳会には出席率が悪いので顔なじみが少く、次なる時には是非皆さんに紹介して呉れる様との御希望なので丁度此の際、この欄を借りてその一端を兼ねさせて頂く事とする。

十一時半辞去、小雨そぼ降る晩秋の街はそぞろ襟元にうそ寒さを感じられたが、此の辺り名にし負う船場のビジネス・センター、兩名共心拭かれた様な清々しさを抱いて、しばし歩むともなく歩を運んだ。

ったにも拘らず須臾も会社の事が念頭より離れず、文字通り身命を賭して奉仕の生涯を尽したと目頭を赤くして切々たる惻隱の哀調にこちらもついホロリとさせられた。左様ならの別辞に先立って、故人の霊を慰むる供養の爲めに何か憶い出の一端でもとの御要請をうけた。

さて、故人が在世中の歩みや功績等は既に日商四十年史に審にされ、又直接事業にタッチされた方々が沢山居られるのでその方へお譲りするとして私は専らプライベートの人間像のコボレ話を取り上げて稿を進める事とする。

楓さんのふるさととは土佐の中村で金物商の間屋を営み、高知に支店を設けて義兄常之助さんが担当されて居た。次兄の隆二郎さんと私は同窓の誼みがあり、日本樟脳の役員を勤められたが病没された。楓さんの兄弟は揃ってスポーツマンで頭脳は明智、囲碁、麻雀等勝負事はズバ抜け

て強かった。弟英吉さんがまだ神戸

高商在学時代、私が折柄商船会社に勤めて居た縁故で御母堂から四季折々の生果物、梅や枇杷など心をこめた贈物の本船便托送の御世話をした。当時慈母の愛情の細やかさに羨望の念禁じ難いものがあった。晩年立身出世されて日商の重役から日本発条、東洋プラス、スクリーナー等の関連事業を次々に開発、美事に成功を収められた。或る年の事、郷里の菩提寺大平寺の住職が古稀を迎えるので御祝に袈裟を贈り度いが一体何れ程かかるものか調べてほしいと相談を受けた。その時不図頭に浮かんだのは、曾て金子さんが店員を戒められた言葉の中に「凡そ商人たる者の定義は商品の棚卸評価の能力を備えている事で之なくしてはその資格はない。」仮に元町で夏帽子一つ買うにしても金子さんは市価式円位のもので充分満足をされ、兵庫駅まで好んでテくられたには金子一流の深い蘊蓄あつての事であつた。私は楓さんの清嘯に答うべく考えた末、京都の石庭で有名な龍安寺下の池畔大珠院に隠棲の元大徳寺管長の後藤瑞蔵老師を顔見識りなので……

提唱を終へし老師にかいつわり
提唱の老師いつまで頭巾着て

……等の句呈の間柄を幸い斡旋を願うて室町の法衣店に行つて見ると宗旨にもよりけりてピンからキリまで千差万別、麻、紫衣から金襴のゴージャスな逸品に至るまで、とても事簡単にサンプル、値段表、ソロバンOKという訳には行かず、全く御手上げの有様、此の上は直接本人同志の交渉に待つ外はないと諦めて其の由を中村の楓本家の世嗣俊一さんと、今神戸製鋼所の運輸部長を勤めて居られる令息雅之さんの御二人へ伝え、結局最後に御二人を法衣店に案内して懸案を解決したものであつた。

楓さんの人と為りは義理人情に厚く、よく後輩の面倒を見られたが、情理の筋を通し、けじめを厳然とすることは、人一倍きびしく、アヤフヤな中途半端で済まされぬタッチで問題の究明には寸毫の苛責なく徹底的であつたため、恐れをなして近より難いと誤解する者も一部にあつた。然し一度論理が判然とすると実に光風霽月のアツサリしたもので「君、一つ盃をやろう……」と呼びかけ、ハメをはずして痛飲する等天衣無縫、洵にも判りのよい人間味の豊かな人柄であつた。その斗魂の逞しさと実行力は常に血が通つて居り、

パイオニヤ、スピリットの権化の様
な人であつた。

次に楓さんの昔独身時代、女子大出の才媛、今の賢夫人を迎えられるまでのエピソードを披露しよう。鈴木商店がミカドホテルを買収、オリビヤや亜米三クラブ等の独身寮にあぶれた連中が須磨一の谷の金子邸のすぐ上の丘陵にある松翠園に屯した頃の事である。序ながら偶々東京の辰巳会幹事鈴木丸衛さんが此の頃の珍らしい写真を送つて来られたが、かえりみれば、大正六年六月、若葉に風薫る時節であつた。六十年も前の事で大半は鬼籍の人となり、残つて居るのは僅か数名となつた。

前列楓さんの踪影の隣に見習店員の紅顔な少年松井君が並んで居る、西川支配人の御氣に入りの児であつた。その松井君が或る日の晩方大分おそくなつたのに帰らず、何やらシクシクとベソをかいて居るので糺して見ると、支配人から原紙五枚程の書翰のコピーを命ぜられ、プレスをしようとした処フライ紙に含ませた水がだぶついてペトペトになり手の付け様がない様になつた。油紙の間に吸取紙を挿入するのを怠つた為めの椿事である。支配人の書体はJペンの走り書きの達筆で接続詞の

「も」の字は万葉仮名の「茂」の字を用いる等仲々読みにくい個所が多く、其所へ右の始末で全く途方に暮れた。既に支配人は退店後であり、何んとか窮状を打開せねばと心胆を砕き、私が原稿を判読して別に書き改め、やっと急場の間に合わせた。文書の復写フライ、コピーは当時見習員に課せられた重要な神経を尖らす仕事の一つであつた。

さて最後に、前号の「テーマ」に触れた「一寸待て」の禁札にからむエピソードを掲げる。楓さんと夜おそく寮に帰つた時の事、一の谷の鉄道線路に沿う青赤のシグナルの明滅は濤声のゴウゴウと共に何となく無気味凄絶で情死の誘発に一役果たす様な舞台装置である。不図見ると、掛け茶屋の附近の松籟囀く林を縫うて蛇の目傘に身を包む若い男女をチラと見た。さてこそ椿事と、此方も若いし妙な仁侠心と好奇心を働かし、物陰に隠れて行動を監視して居ると、何の事はない喋々囁々鴛鴦恋の一幕で、開いた口がふさがらず楓さんと二人思わず顔見合せて苦笑したナンセンス物語り、此れをピリオドに稿を終る。

旧友よ何処にゐる

竹下富士松

私共が鈴木商店に入店して以来今年が恰度五十年目になる。思えば大正八年四月二十四日、高小卒志望者百二十七名の中から選ばれて採用された十八名が本店の玄関にその第一

歩を印した年である。あの時はみんな若かった、いや若いというよりまだ十四、五才の小僧だつた。その小僧が本店の見習員として採用されたのだから、子供心にもその得意や思

後列右より

前列右より

() は当時の所屬部

中居円次郎(外電) 川越 孝教(文書)
沖 豊茂(会計) 河野 正雄(受付)
中道勇次郎(造船) 宮脇弘吉(土地林)
秋山朝次郎(鉱山) 竹下富士松(教育)
細見 達二(受付) 中村 省三(鉄材)
曾我 直喜(信書) 山崎 勝治(砂糖)
久保 辰生(造船) 長尾 利三(支配人室)
村上 正留(会計) 岡崎 滋春(樟脳)
牛島 武雄(麦酒)
久米 勝男(受付)

うべしであらう。

何しろボンさんとはいえ天下の鈴木の中の幸せを、我一人独占したかのような感激であつた。その当時十八名の同僚諸兄が綴つた感想文や日々の行動、それに採用試験の成績その他の記録が纏められて一冊の本となり、現在私の手許に残っている。どういふ経路で私の手許に保存されたか詳かでないが表紙は大分くたびれている。十八名の諸兄今尚健在であれば是非兄等のほほえましい迷文(ごめん名文の誤り)と見事な当時の筆跡をお目につけてみたいと思う。「見習員に採用す」「爾今月俸金参円を給す」という二通の辞令を頂いた当時の感激が今更のようによみがえり懐旧一入深いものを覚えるだろう。

諸兄よあれから五十年有為転変の世の中とはいえ、あまりにも甚だしい変りようではないか。主家鈴木も今はなく先輩同僚も亦支離分散したカネ辰のれんも米印の旗印も昔の語り草となりつつある。その後の日本は世界の列強を相手に大戦に突入した大和魂もまた花と散つた。そして敗戦、あの終戦直後の惨めさ、国民は木の実草の莖を食つて生き

びた。銀シャリをみては子の飢えに思いをいたし、一握りの大豆を手にしては家族と共にわけあつた。その日本が日本国民が、今はどうでしょう、望んで得られないものはない程豊かな国になつた。

戦後二十年、確かに日本は復興した。併し復興した豊かな現在の日本は私共ボンさん時代の日本ではない。敗戦を境にしてよみ返つた日本は新しい日本で昔の日本の姿に返つたのではない。鈴木が残した偉大な事業の足蹟は大き芽を出して各々その業界に君臨している。解体された大財閥も元の姿に返つた。だが併しその質はどうか、温情主義、家族主義なんてものはその片鱗さえ覗う事は出来ない。労資は対立し、師弟は相容れず、ヤレ個人ぞ自由ぞ権利ぞと叫び、自己の人生のみを謳歌している。尊敬とか、感謝奉仕とか、犠牲とかいふ言葉は次第に活字から消えていくような錯覚さえ覚える。現在の青年に孝行の意味を問えば何んと答える、義務の解釈を求めたら何んと答える、人道とは車の通れない道としか考えていない。だが併しその反面人間が月面を歩き、その姿を家にてカラーテレビでみられる世の中になつた。月は眺めて物思

